全国水平社の源流を歩く

聞き取り
西光寺住職

清原隆宣さん

奈良の県外視察研修（1面）では、西光寺の清原隆宣さんからの聞き取りをおこないました。清原さんは水平社創立の背景や水平社宣言に込められた思いなどを語ってくれました。その時の話の一部を紹介します。

水平社創立の背景と思想について語る清原隆宣さん

世間の間違った「ものさし」を変える

水平社宣言を起草した西光万吉（本名・清原一隆）は、私の祖父の兄。西光万吉は運動で走り回っていたから、弟である私の祖父が住職になり西光寺を継いだ。

水平社というのは、差別は人間の間違った「ものさし」からおこる。この間違った「ものさし」を変えようという運動だ。

解放令が出ても厳しい差別は続いていた。役場や学校も公然と差別していた時代だ。明治に入り小学校が出来たが議会でも議論になり、部落の子どもたちだけ山にあるボロ小屋の別学校をつくって「お前たちはそこに行け」と差別した。

目の前に小学校があるのに「お前らは来るな」と。そのことに部落の人たちは怒り、11ヶ月の同盟休校を実施し、ようやく1892年、学校が統合された。水平社創立の30年前だ。こういう闘いがベースにあり、水平社創立にいたった。

「エタであることを誇りうる」とは

自分たちは差別のなかを生きてきたからこそ、差別の痛みが人よりよくわかる。だからこそ、自分たちがその思いを持って、立ち上がり運動をすすめていかなければいけない。

住井すゑさんが『橋のない川』を書くきっかけになったエピソードがある。『つづり方兄妹』（久松静児・58年）という映画がある。

映画は戦後の引揚げ一家の物語で、貧しい生活の中で作文の上手な三兄妹が健気に生きていたが、新聞配達をしていた文雄という八歳になる弟が肺炎になって死んでしまう。

この映画をある小学校でみているとき、ふと気づいたことがあった。それは部落の子どもと他の子どもとでは、泣く場面がまるで違っていたということだった。

部落の子どもたちは文雄が高熱を出して苦しんでいるシーンでワーンと泣き出したのだが、他の地域の子どもたちは文雄が息をひきとったところで泣き出したのである。

泣くシーンがどうしてこうも違うのか、とても気になって合点がいかなかった。

そこでその晩に部落の子どもたちにその理由を尋ねてみた。

「先生、人間はみないっぺんは死ぬんや」「だから死ぬのは怖くもないし、悲しくもない」「でも悲しいのは、あの子みたいに、**貧乏で病院にもいけず、手遅れになって死んでいってしまったからや。あの子を殺したのは貧乏なんや、差別なんや！」「死んでかから泣いたっても間に合うもんか。死んでから悲しいっていうんやったら、なんでその貧乏の差別に殺されていく命に、怒ったり、わめいたりしてくれないんだ！**」と子どもの声が響き渡った。

「人の世に熱あれ　人間に光あれ」と刻まれた西光万吉さんの墓碑

住井さんは涙がとまらなかった。このこどもたちの人間の輝き、人間の思いをつづりたいと思い『橋のない川』を書いた。

「人間を尊敬する」世間を部落なみにする

水平社運動は、部落がダメだからがんばって世間なみになることを求めたのではない。

差別は間違った世間のものさしによってつくられている。その世間のものさしを変えていこう。そのときに、私たち部落の中にあった**「人間を尊敬する」というものさしを間違った世間に広めていって、世間を部落並みにしようとした。**

そうすれば、世間が人を人として大事にしようという世の中になる。

だから水平社宣言は「部落民に熱と光を」ではなく「人の世に熱あれ、人間に光あれ」といったのだ。

「教科書は人権課題の宝庫」④

萩で「日本初の女性解剖」

山口県人権・同和教育研究協議会
事務局長　松本卓也

近代医学の礎を担った被差別部落の人たち

蘭学を学んでいた杉田玄白や前野良沢たちが、オランダの医学書を苦心して翻訳し、1774年に「解体新書」という医学書を完成したことは、みなさんも知っているのではないですか。

では栗山孝庵という人を知っていますか？長州藩（山口県）萩の医者・栗山孝庵は、長崎に医学の勉強に行き、今までの人体説明に、これでよいのかという疑問を持っていました。

1754年、京都の医者・山脇東洋たちが見守る中、日本で最初の腑分け（解体・解剖）が行われた記録を「臓志」という一冊の本にまとめました。

ある日、山脇東洋から、孝庵のもとに一冊の本が届きました。孝庵は、自分も東洋のように人体の仕組みを確かめたいと思い、そのための腑分けを決意しました。

そして1759年、萩の大谷刑場で、日本で最初の女性の腑分けがおこなわれました。

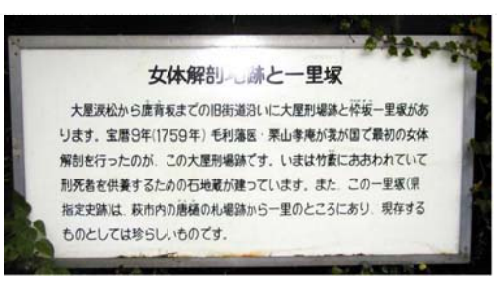
約100人もの医学を志す者が、腑分けを見学しようと集まりました。このように多くの人が見学するなか、孝庵たちに頼まれた部落の人が、女性の死体に近づきました。

部落の人は、すばらしい技術で胸に刃（メス）を入れました。そして、少しずつ切り開いていき乳腺を確かめました。その後、肋骨・気管・食道など、次々に刃（メス）が進められました。

それまでは男性と女性の内蔵は、左右が逆になっていると思われていました。しかし、孝庵たちの腑分けで、そのことが間違っていた（男性も女性も同じ）ということが初めて確かめられました。

孝庵は、この腑分けを報告書として残しました。報告書の中には、被差別部落の人が腑分けを行ったことや胆嚢で薬を作っていたことなどが書かれていました。このことから、江戸時代中頃以降、医者の仕事の一部を部落の人たちがおこなっていたことが分かります。

日本では、中世の頃から人間の腑分けをおこなうことは許されてませんでした。江戸時代の医者たちも人間の体の仕組みを知りませんでした。そんななか、山脇東洋や栗山孝庵たちが人間の腑分けを実現しました。

想像ではなく実際に確かめる科学的な近代医学の研究への第一歩が創られました。しかし、実際に刃（メス）をにぎったのは、まぎれもなく部落の人たちでした。

本当のことを知りたいと思う孝庵たち医者と、すばらしい技術と経験をもつ被差別部落の人たちの間には、身分を越える信頼があったのです。